

---

# 虚構を愛したものの達

吉川リョク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虚構を愛したも達

### 【Nコード】

N3613X

### 【作者名】

吉川リヨク

### 【あらすじ】

世界が砕けた

もう、悲劇は繰り返させない

そう誓った少女は見ず知らずの少年にこう告げた

「私に……力を貸してください」

## 第一章　歪んだ日常

《プロローグ　砕けた世界》

また世界が壊れる

過ちは繰り返させないと誓ったのに

力無きものは消える、それが世界の理だ

……消えたくない

しかし世界は壊れ、理も砕けた

えっ？

今なら逃げられる

しかし、どこに……

【奴】が他の世界を消し去るのも時間の問題だ。この【世界  
だった存在】をまた増やすのか？過ちは繰り返させない。君達はそ  
う誓ったのではないのか？

しかし、私たちに力はない。力無きものは消える宿め……

理は碎けた、私はそう言ったはずだ。……【門】を解放する。  
そこから別の世界に行くのだ。

あなたは……あなたはどつするの！？

君達が力を得るまで、奴を足止めをする。

そんなの、不可能……

君達が奴を倒す力を得ることを祈ろう。

彼に門に押し込まれ、彼女の体は別世界へと旅立った。門が閉じ

る際に見えた破滅の翼は、彼の体を消滅させる。

《第一章〜歪んだ日常〜》

見たことない場所に立っていた。

そこは月と太陽が同時に空を照らし、緑の絶えない草原が広がっている。美しい場所と言われたら、真っ先に想像してしまうであろう場所だ。

しかし、その場所はパズルのピースのように碎け、混沌の闇に呑まれてしまう。そして、その闇に呑まれる前がある声が聞こえるのだ。

「気を付けて、あなたの世界も碎けてしまう」

と……

「起きろ、燕堂！」  
えんとどう

「ぐばはっ！」

教室に拳骨の快音と情けない声が響く。

「お前、俺の授業で寝るとは、本当に度胸があるな……」

拳骨を喰らったせいで、頭の中がぐちゃぐちゃになっちゃった…  
…夢の内容忘れた。俺の目の前にはいかにも生活指導担当のゴリラ  
教師が仁王立ちで佇んでいる。

「何を言っんですか。俺がいつ寝てたと錯覚しました？」

俺は蛇口を捻って水を出すと、それで顔を洗う。

俺が通う高校は4年くらい前に出来たもので、デパートのような真新しさがある。もちろん、トイレもそんな感じだ。制服はブレザーだが、ネクタイが窮屈で敵わない。

もうすぐ夏なのだが、未だに冬服で過ごしている。校則は窮屈でならない。

「暑い……」

顔を洗った後に目を細めながら鏡を眺める。早く戻らないと、あのゴリラにしばかれてしまう。俺はポケットからハンカチを取り出して顔を拭くと、すぐさま教室に向かう。

「そっさいや、夢の内容……」



何か大切なことを言われたような気がする。夢で大切なことってなんだよとなるんだが、本当に大切なことを言われたような気がする……

「まあ、いつか」

結局夢なんだからそんなに大切なことじゃないだろ。俺は気持ち切り替え、教室のドアを開く。

その時、甲高いチャイムの音が耳に入ってくる。

「あつ……」

タイミング良すぎるだろ。そして、後ろに現れた殺気に誘われ、首をブリキ人形のように回す。そこにはあのゴリラが腕組みをして立っていた。

「放課後、職員室に来い」

どつちやら、ゴリラの呼び出しにより、俺の放課後は無くなるよう  
だ。

「くっそ、あのクソゴリラめ……」

説教は一時間近くあり、すでに日が落ちかけている。俺は今2年  
生なのだが、進路が云々とうるさく言われる。

説教だけで済んだのだからまだいい方だ。場合によっては反省文  
を書かされる。ゴリラは大袈裟過ぎて困る。

自転車通学をしているので、俺は駐輪所へと向かっていたのだが、  
そこにある人物が自転車に跨がりながら待っていた。

「説教終わったみたいだね」

「折州……待ってたのか？」  
おりす

自転車に跨がっていた青髪の少年は当然と胸を張り、俺に微笑みかける。

「今日も【店】に行くと思ったからね。待ってたんだ。早く行こうよ」

「ああ、そうだな」

俺は自転車に跨がり、折州についていく。

しばらく進んだところで、折州が「そついえばさ」と話を振ってくる。

「どつじした？」

「最近、変な事件多いよね。モンスターが襲撃！とかよく分からない見出しの」

折州が言う事件とは、最近話題によく上がるやつだ。銀行にモンスターが来たとか、空に宇宙人がいたとか。お前らSF見すぎと言うが、そういった事件の犯人は未だに捕まっていないから不思議だ。

「で、その事件が多いのがどうしたんだ？」

すでに聞き飽きた話を振るわけには理由があるのだろう。俺は溜め息混じりに折州に問いかける。

「それがさ、これ見てよ」

折州が自転車を止めてまで見せてきた写真を見る。街灯に照らされた新聞の白黒写真は少し見にくかったが、俺が驚くのにそこまで時間をかける必要が無かった。

「これ……【カタストル】……だよな？」

カタストル 俺と折州がしているカードゲーム【遊戯王】に現れるモンスターの名前だ。歪な形をした兵器で、モンスター達を蹂躪する。しかし、なぜ現実の写真にカタストルが写っているのかが理解できない。

「それ、最近隣町で撮られた写真なんだけど他にもあつて、こつちにはウルキサス、こつちにはグングニル、明らかに遊戯王のモンスターなんだよ」

ウルキサス 炎を纏う格闘戦士 とグングニル 氷を纏うドラゴン ……なぜ遊戯王のモンスターが？

「少しずつ、俺の中に生まれた不安が大きくなる。何かの予兆？警告？」

「これが作り物ならいいんだけどね。本物なら世界が終わるよ……」

世界が終わる？その時、俺の頭の中に何かが響く。

……て

頭が痛い。すぐにこの場所から逃げ出したい。

「クウ？どうしたの？」

折州は俺のアダ名を呼びながら心配そうに、俯く俺の顔を覗き込む。しかし、それでも頭に何かが響く。聞き取りにくいのが、声のよ  
うだ。

……けて、た……

助けて！

その言葉を聞いた途端、俺は自転車を倒して走り出す。後ろからは折州が追いかけているが、事情を話している暇はない。誰かが助けを求めている気がした。そんな気がしただけ。

確信があるわけではない。しかし、あの声は確かに俺を呼んでいたのだ。

頭の中に響いた声を感じる方に無我夢中に走る。なぜ、見ず知らずの奴のために必死になっているのだろう。

それこそ、今この世界は不思議な現象に襲われている。頭に声が響くなど、不思議にもほどがある。関わらない方がいい。

「だけど……」

理性の自分が語りかけてくる言葉を全て払い、俺は俺自身に語りかけるように口を開く。

「助けを求められて、助けないのはどうかと思うー！」

その言葉を戒めのように自分の意思に打ち付け、俺はコンクリートの塀に囲まれた十字路を曲がる。

曲がった先にあつたのは非日常の始まり

そこに塀にもたれ掛かる女の子がいた。藍色のミニスカート、鎖骨が晒された青みがかつたＴシャツの上にボロボロのローブを着ていたのだが、体中が傷に覆われており、頭からは血が流れている。

それだけならよかった。それだけなら、女の子を病院に連れて行

き、それで終わりだったのだから。

しかし、女の子に立ちほだかるは翼を生やしたモノ、例えるなら鳥人だ。さらにそいつと初対面じゃないってところが困る。

「ドラグニティ・ミリトゥム……！」

そう女の子を襲う鳥人も遊戯王のモンスターの一体なのだ。

本当にこの世界はどうなっているのだ。

俺が自問自答を始めようとした時、女の子が眼を覚ます。暗闇の中で街灯に照らされたおかげで女の子の顔が俺の眼に写し出される。

そこには、若草色のポニーテールを持つ女の子がいた。

そう、彼女も俺が知る存在の一つ。だが、ミリトゥムとは比べ物にならない存在だ。俺は動揺を隠せないまま、彼女の名前を呼んだ。

「ウイン………なのか？」

「……………」



ウィンと思った女の子は俺と目を合わせた途端に頭が下がる。どうやら気絶しているようだ。

しかし、今だに俺の目の前にはモンスターである鳥人が佇んでいるわけで、危険を回避できたわけではない。ミリトゥムは剣らしきものを抜き出すと、俺に向けて構える。

「くそっ……！」

勝手な観測だが、今の俺は明らかにミリトゥムの攻撃範囲内にいるようだ。

いや待て、このミリトゥムが本当のミリトゥムかすらまだ確定していないのに、そんな観測をしているのか？もしかしたら、何かの撮影かもしれない。コスプレイヤー達の妄想の賜物かもしれない。そうか！これは夢なんだ！とりあえず、ゴリラに叱られるらへんから  
夢

「のわぁー！」

どうやらコスプレイヤーではなく殺人鬼のようだ。ミリトゥムら

しき存在は躊躇いなく俺へと斬りかかり、俺を窮屈にしたネクタイを真つ二つに切断する。間一髪避けたが、あつちに懐へ入られてしまった。慣れた手付きで剣を構え直すと、次は剣を片手で振り上げる。

しかし、さっきの攻撃を避けたせいでバランスを崩していた俺に避ける術は残されていなかった。

ヤバイ、死んだ

自分の不幸を呪おうとした時、ミリトゥムに何か大きな物体がぶつかり、その体を4、5メートル先へと飛ばす。

「クウ！大丈夫！？」

後から俺を追いかけて来た折州は、自転車に乗ったままミリトゥムへと突撃したのだ。

「あの人、思わず突き飛ばしちゃったけど大丈夫かな……」

この子、恐ろしい子！

劇画なりアクションを取りながらも、俺は若草色ポニーテールの少女へと駆け寄る、

「おい、大丈夫か！」

しかし、反応はない。  
こんなに傷だらけになるまで、この子は何をしたかったのだろうか。

抱いた疑問が彼女へと惹かれる理由になるのに、時間はなかった。

「クウ、あいつが……」

彼女に気を取られていた間にミリトゥムが立ち上がって来る。この状況でやることは一つだな。

「折州」

「わかってる」

ミリトゥムが剣を構え直した途端、俺達の踵はコンパスの如く捻れ、逆方向へと逃げる。

咄嗟にあの子も抱えて来たが、そこら辺は気にしないでおう。

「うわっ、やっぱり来たよ！」

自転車をキックボードと同じように使いながら折州が叫ぶ。

やっぱり鳥だから飛んで来るのかと思いつながら振り向くと、俺のきた 予想を裏切る光景が広がっていた。

「走って来たあああ！」

どこのフライングをした黒人ワールドレコーダーだと言わんばかりのフォームでミリトゥムは俺達へと迫ってくる。

なにあれ、期待外れにもほどがあるのだが、笑えないことにミリトゥムと俺達の差は拡がらず、少しずつ差が埋められていく。

「クウ、この先は確か」

「……！、しまった！」

焦りのせいで冷静さに欠けていた俺達は崖の上に作られた自然公園のフェンスまで追い込まれていた。

フェンスの先には学校の他に明かりが散らばった宝石のように煌めいている。しかし、そんな光景の後ろには今まさに俺達に斬りかかるうとしている鳥人の姿がある。

「ここまでか……！」

腕の中で眠る見知らぬ少女を抱え込み、俺の表情は歪んでいく。自分からわざわざ突っ込んで、友達を巻き込んで死ぬなんて、最悪過ぎる。

せめて、せめて……！！

「折州、この子を持って逃げれ」

「君を置いて逃げることはしないからね。大方、俺が囿になるとか言うつもりだったんでしょ？」

こいつ、読心術士か。長年つき合ってるから行動が読まれているわけなのか。

どちらでもいいが、俺はいい友達を持ったなと自画自賛していた。しかし、状況は変わらない。ミリトゥムが一瞬屈伸したかと思っただ時、その体が俺に目掛けて低空飛行で飛んでくる。

「あっ……」

俺が反応できた時、すでに右手に握られていた刀が下から掬い上げるように斬りかかろうとしていた。

だが、いきなり前から知らない力がかかり、俺の体はフェンスへとぶつかる。その後刀と何かがぶつかり、甲高い金属音が公園に響き渡る。

ミリトゥムと刃を交えていたのは、あの若草色のポニーテールの少女だった。少女の手にはさつきまで無かった白い竜を模した杖があり、それが刃を抑えている。

「……お願いが……あります」

突如聞こえた声に思わず俺は周りを見渡す。そして、その声の主は目の前にいる少女のものだと気づく。少女は鳥人の刃を弾いてから何歩か下がり、俺に近づいてくる。その体は今にも力尽きそうなくらいフラフラだ。

「私に、力を貸してください」

どういうことか分からない。いきなり力を貸せとか言われても、どのように貸せばいいのかと疑問が生まれるだけだ。

しかし、俺は頷いていた。このままミリトゥムに殺されるより、この子に賭けてみようと思ったからだ。

俺の返事を聞き、少し表情に余裕の生まれた少女は握っていた杖を振り上げた後に地面にそれを降り下ろす。

そこから地面が水の波紋のように波打ち、俺達の周りの景色がその波紋に支配されていった。

「決闘空間【ゾーン】形成完了……」

「な、なんだこれ！」

テンパリながら周りを見渡していると、少女は杖を支えにしながら俺の方に振り返る。

「ゾーン……モンスターによる干渉をデュエルだけにする空間ですよ」

少女は笑みを無理矢理浮かべようとするが、生傷が絶えないその体で笑われても、こっちは笑えない。

「デュエルだけってことは……」

だいたいの予想はしていたが、鳥人は腕に横に長い盤【デュエルディスク】を装着していた。



「あいつと戦えと……負けたら？」

「……私にもわかりませんが、何かは起こります」

申し訳なさそうな顔で俯く少女の頭を無造作に撫でて、俺は一歩前が出る。

「大丈夫なの！？負けたら……死ぬかもしれないんだよ！？」

折州からかけられた言葉は確かに合ってるが、今さら退けない。

「逃げても負けても死ぬなら、俺は戦う。それが男つてもんだろ」

心配そうな顔で見つめてくる折州に振り向き際に笑いかけ、俺は鳥人と視線を合わせる。

「クウ……って言う名前なんですか？」

「いや、燕堂えんどう 空そらって名前だ。まあ、クウでいいけどさ。君の名前は……」応聞く」

「ウインです。一応言っときますね」

俺に笑いかけてきた少女は本当に人間のようで、【モンスター】のように見えなかった。ウインが持つ杖の先を俺の右腕に当てると、そこにデュエルディスクが現れる。

「おお、すごいな」

俺がディスクを見た後に少女を見ようとしたが、すでに少女の姿はなかった。辺りを見渡した後に俺の視線はディスクの方に向けられる。

『さあ、始めましょう!』

「ディスクになるなら、事前に言えよ!ビックリするだろ!」

もはや色々有りすぎてテンションがおかしくなっているようだ。夢ならそろそろ覚めてほしい。ネクタイ半分になったから、明日ゴリラに色々言われる運命か。

ネクタイを斬ったあいつは絶対許さない。そんなことを考えながら、俺はウインであるディスクを展開する。デッキまで準備されるとは親切だ。

『いきますよ!』

「おう!」

「……デュエル」

しゃべった！

・クウ／LP4000

VS

・ミリトゥム／LP4000

「俺のターン、ドロー！」

勢いよくカードを引く。このデッキは初めてだが、なぜか内容が分かる。これもウインのおかげか？

手札には見たことのないカードばかりだが、俺は迷いなくカードを選んでディスクへと置く。

「俺は【フルート・マジシャン】を攻撃表示で召喚する！」

俺のフィールドに現れたのはフルートを軽快に弾き鳴らす桃色髪の少女だ。

【フルート・マジシャン】

3

ATK 1200

「フルート・マジシャンの効果発動。このカードが召喚に成功した時、デッキの中からレベル4以下の風属性・魔法使い族を一枚選び、手札に加えてシャッフル。その後、手札を一枚選びデッキの一番上か下に置く。」

俺はデッキから【トランペット・マジシャン】を加え、シャッフルをした後に手札のカードをデッキの一番下に置く。カードを一枚伏せて、ターンエンド」

・クウ

LP4000

手札4

「ドロー、スタン、メイン」

鳥人は各フェイスの名前を順番ずつ言うと、手札のカードをデッキに置く。

「ドラグニティ ブランディストックを攻撃表示で召喚する」

ドラグニティ ブランディストック

1

ATK 600

「さらに、ブランディストックをフィールドから墓地に送り、手札に存在するドラグニティアームズ ミスティルを特殊召喚する」

最初に現れた小さな竜が姿を消すと、鎧を纏った巨大な竜が姿を現す。

ドラグニティアームズ ミスティル

6

ATK 2100

「このカードが手札より召喚及び特殊召喚成功時、墓地に存在するドラグニティと名の付くドラゴン族モンスターを装備することができる。」

ブランディストックをミスティルに装備」

鎧を纏った竜にさっきの小さな竜が装備され、その纏うオーラが

変わる。

「バトル。ミスティルでフルート・マジシャンに攻撃」

ミスティルと呼ばれた金色の竜は自身の半分はある一メートルほどの刀を構え、桃色ツインテールの女の子を切り裂く。

「ぐあ！」

切り裂かれたような痛みが上半身に走り、俺は膝を折り曲げてしまっ。

クウLP4000 3100

「クウ！」

「大丈夫だ……リバーズカードを発動！【レクイエム・ハーモニー】。これは、風属性モンスターが相手によって破壊された時、デッキから同じ種族、同じレベルのモンスターを特殊召喚できる！」

俺はデッキから【ホルン・マジシャン】を攻撃表示で特殊召喚する！」

【ホルン・マジシャン】

3

ATK1000

心配性な折州のために振り向いたのだが、正直痛くてたまらない。しかし、鳥人野郎はまだターンを終了しようとはしなかった。

「ブランディストックの効果によりミスティルは一回のバトルフェイズに二回攻撃が可能。ミスティル、ホルン・マジシャンに攻撃」

舞い上がった金色の翼は闇夜の月を背に刀を構え、新たに現れた水色サイドテールの子にその刃を降り下ろす。

「ぐっ……ホルン・マジシャンは召喚、特殊召喚したターンに破壊はされない……」



クウLP3100 2000

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

ミルトウム

LP4000

手札3

「……今の攻撃、ブランディストックの効果を知っていれば、ホルン・マジシャンは守備で出すはず。完全に奴のミスだな」

クウ達から少し離れたマンションの上で二つの影が揺らいでいた。

「別にいい。敵の失敗はこっちにとって好都合なだけ」

素っ気なく答えるは銀髪に黒いサングラスを掛けた少年、もう一人はオールバックの黒髪に吊り上がった鋭く緑色の目。闇に揺らめくその目は得体の知れない不気味さを漂わす。そして、その目は確実にクウへと向けられていた。

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズにホルン・マジシャンの効果を発動！このカードがスタンバイフェイズに攻撃表示なら、表側表示モンスター一体の表示形式を変更できる。俺はミスティルの表示形式を守備にする！」

ドラグニティアームズ ミスティル  
DEF 1500

「行くぞ     メインフェイスに俺は手札から風霊使いウインを通常  
召喚！」

闇夜を裂き、若草色ポニーテールの少女がローブをなびかせながら現れる。

風霊使いウイン

3

ATK 500

「俺は自分フィールドに存在するホルン・マジシャンと風霊使いウインを墓地に送り、デッキから憑依装着ウインを特殊召喚する！」

隣にいたサイドテールの少女が風になり、ウインに纏ったかと思えば、その姿は少し大人びたものになっていた。

憑依装着ウイン

4

ATK1850

「憑依装着ウインは自身の効果で特殊召喚した時、貫通ダメージを与える効果を持つ！これでミスティルを破壊して、尚且貫通ダメージだ！」

ウインでミスティルに攻撃！ウィザード・ウインド！」

ウインが飛び上がり、その白い杖に風を集める。しかし、ミリトウムは怯むことなく、リバーズカードを発動していた。

「リバーズカード【イタクアの暴風】を発動。相手フィールドのモンスターの表示形式を全て変更」

「なっ！」

突如吹いた突風にウインの体が吹き飛ばされ、膝を着いた状態へとなる。

憑依装着ウイン

DEF 1500

「くつ、リバーズカードを2枚伏せてターンエンド」

・クウ

LP2000

手札2

「ドロー、スタン、メイン、ミスティルをゲームから除外、ドラグニティアームズレヴァティンを攻撃表示で特殊召喚」

金色が光輝くと、太陽のような輝きを放つ橙色の竜が大剣を構えていた。

ドラグニティアームズレヴァティン

ATK 2600

「レヴァティン効果、ブランディストックを装備。バトル、レヴァ

テインでウインに攻撃」

「2600の2回攻撃……これを受けたらクウは！」

「リバーズカード、モンスターレリーフを発動！相手の攻撃宣言時にモンスターを一体手札に戻し、手札からレベル4モンスターを特殊召喚する。俺はウインを手札に戻し、【トランペット・マジシャン】を守備表示で特殊召喚！」

【トランペット・マジシャン】

4

DEF 1000

「さらに、トランペット・マジシャンの効果により墓地のレベル3以下の風属性、魔法使い族を守備表示で特殊召喚できる！  
来い、ホルン・マジシャン！」

【ホルン・マジシャン】

3

DEF 1000

「……トランペット・マジシャンに攻撃」

俺のモンスターの数が変動したため、巻き戻しが起こる。ミリトウムは表情を変えることなくトランペット・マジシャンへ攻撃する。

「ターンエンド」

・ミリトウム

LP4000

手札3

「そうか、ホルン・マジシャンは特殊召喚したターンは破壊されない効果があつた！」

「だが……全然ダメージが入らないな……」

なんとか凌いだが、勝てる気がしない。ライフポイントが減るた

びに力が抜ける……もし、0になったら……俺は……

『クウ、しつかり!』

突然聞こえた声に肩が飛び上がる。そうだった、俺は今一人で戦ってるわけじゃない。

後ろには友が、腕には……

「俺のターン、ドロー！チューナーモンスター【レップウリュウ】を召喚！その召喚時効果により、風霊使いウインを守備表示で特殊召喚！」

【レップウリュウ】

3

ATK 1100

風霊使いウイン

3

DEF 1500



「チューナー……モンスター……」

ミリトゥムは目の前に現れた小さな竜を見つめ、初めて表情を歪める。

守備で特殊召喚されたウインと俺は互いに目で合図をすると、ウインとレップウリュウが空中へ飛び上がる。

「レベル3風霊使いウインをレベル3レップウリュウにチューニング！」

舞い上がったレップウリュウは3つの輪となり、その輪を連ならせるようにウインを迎え入れる。

「風が吹き荒れ、嵐が渦巻く　俺の愛した虚構は竜の翼を羽ばたかせる！」

シンクロ召喚！天舞せよ、【竜装魔術師ウイン】！」

彼女らを包み込んだ光が晴れた途端に現れたのは竜の翼を広げ、白い杖を軽快に振り回すウインの姿だった。

【竜装魔術師ウイン】

6

ATK 2300

「俺はホルン・マジシャン（ATK 1000）を攻撃表示に変えて、バトル！竜装魔術師ウインでレヴァティンを攻撃！」

「えっ、ウインの攻撃力はレヴァティンより下だよ！？」

「大丈夫です！」

「竜装魔術師ウインの効果、発動！このカードが自身の攻撃力より高い数値を持つモンスターと戦闘する時、攻撃力を1000ポイント上げる！ブラスト・フィールド！」

俺が効果発動の宣言をした瞬間、ウインの後ろから追い風が吹き、その力を上昇させる。

『はああああああ！』

【竜装魔術師ウィン】

ATK 2300 3300

「貫け！ドラグーン・ストーム！」

ウィンが作り出した風は竜の形を成して、レヴァティンを貫き、その姿を消滅させる。

ミリトゥムLP4000 3300

「ホルン・マジシャンでダイレクトアタック！」

水色サイドテールの少女が必死にホルンを吹き鳴らし、その超音波でミリトゥムにダメージを与える。

ミリトゥムLP3300 2300

「よし、ライフの差が縮まった！」

「俺はこれでターンエンドだ」

・クウ

LP2000

手札2

「ドロー……、スタン、メイン……」

カードを引くミリトゥムだが、その体にはすでに生氣は込められてはいなかった。

「ドラグニティ レギオンを召喚。効果により、墓地のブランディ

ストックを装備」

ドラグニティ レギオン

3

ATK 1200

「ブランディストックを装備したレギオンの効果、ブランディストックを墓地に送り、竜装魔術師ウインを破壊する」

レギオンは躊躇いなくブランディストックをウインに向けて投げてくる。だが、そんなものを通す俺と思っただか。

「リバーズカード発動！風霊術 『雅』！竜装魔術師ウインをリリースし、レギオンをデッキの下へ！」

ブランディストックという名の弾を避けたウインはその身を風に変え、レギオンへと体当たりする。

「……」

ミリトウムは自身の手札を確認する。そこにはゴッドボードアタックがあるが、それを発動することは叶わなくなった。

「ターン……エンド」

・ミリトウム

LP2300

手札2

「俺のターン！俺は憑依装着ウインを召喚！」

最後の最後まで気を抜かないようにしなとな。まだデュエルは終わってないし。

憑依装着ウイン

ATK 1850

「バトル、ホルン・マジシャンでダイレクトアタック！」

超音波が再びミリトゥムを襲う。

・ミリトゥム

LP2300 1300

「そして 憑依装着ウインのダイレクトアタック！ウィザード・ウインド！」

杖に作り出された小さい嵐がミリトゥムに向けて放たれる。

・ミリトゥム

LP1300 0

ミリトゥムのライフが0になり、ウインが作り出していたゾーンが水晶のように砕け、透明な破片が宙を舞う。破片はまるで俺達が

そこにいることを知っているかのように避けながら地面へと落ちていく。

「勝った……」

「やったー！クウが勝ったー！」

飛び跳ねる折州を余所に、デュエルディスクになっていたウィンが人の姿へと戻る。

しばらく静寂によって公園が支配されるが、彼女の瞳をゆっくりと開くと俺の世界が動き出す。

「勝てて、よかった……」

そう言って、ウィンが俺へと微笑む。

……危ない、抱き締めそうになった。

俺が変な煩惱に振り回されていると、ミルトウムの体に変化が始まる。現実にはダメージが入るデュエルでの敗者、マンガやアニメで



のお約束なら……闇の中へ消えてしまっ。

まさにその通りだった。ミリトゥムに黒い触手のようなものが絡み付き、その体を影の中へと飲み込ませる。

ただ見てるしかできない。未知への恐怖が俺の体を縛り付ける。ミリトゥムは抵抗することはなく、受け入れるように影へ飲まれていった。

「……」

再び静寂が公園に広がる。これが、戦いの後の虚しさと言う奴なのか？しかし、この程度で事件が終わるはずはない。そこに確信はないが、このデュエルで俺達の日常が歪んだことは間違いない。

内容は覚えてないが、不思議な夢

現実にモンスターが現れる

現実にダメージが入るデュエル

ウインの登場

「ウイン」

俺は改まり、彼女と向き合う。

「この世界で何が起きているか、教えてくれないか？」

「……私が知る限りのことなら、全て話します」

「なら、ここじゃなくて【店】に行こうよ」

暗い雰囲気だった俺達に笑いかけてきたのは折州だった。確かに外よりいいな。

「あの……店って？」

当然ながら、ウインが頭を傾げながら問いかけてくる。

「俺達の仲間がいる場所だよ」

それだけを告げ、俺達はウィンを連れて歩き出す。

T o b e c o n t i n u e . . . . .

第二章「同じ意思が集う場所」（前書き）

## 第二章 ー同じ意思が集う場所ー

公園を後にしたクウ、折州、ウインの三人はクウの自転車を拾った後にビルが煌めく街の方へと足を運んでいた。

繁華街と呼べるほど豪華ではないが、まだ高校生が自由に動いてる時間帯なのかカラオケやコンビニなどの店以外にも、よく分からない店のネオンも煌めいている。

しかし、自転車を押して進む二人の後ろからついてくるウインの姿にすれ違う人々が目を丸くしていた。

それもそのはず、ウインの服装と言えばポロボロのローブの下にこれまたポロボロのＴシャツとスカートなのだから、どう見てもネオン街に来る人の姿ではない。

あらかじめクウが制服の上着を貸して服装を隠させていたが、ポロボロのローブが無駄に際立っている。

何度か絡まれたのだが、その度にクウと折州が自転車でナンパ男達を轢いて行ったので、彼女自身には何も無く目的地へとたどり着く。

「店に着くだけで何人轢いた？」

「僕は10人くらい轢いたよ？」

「……20人か」

後ろから「何の会話!？」と言われてもおかしくないことを話す二人とウィンがたどり着いたのは、5、6階くらいのビル二棟に挟まれた「カードショップ ラスカーク」という看板を掲げる小さな店だった。ガラス張りされており、外からでも確認できる店内には子供の姿はなく、高校生以上の人しか見えない。

「さて、行くか」

クウが先陣を切り、手でガラス張りのドアを開いて中へ入る。

「ウィンさんも来なよ。外はまだ寒いし」

「あ、はい……」

折州にそう言われ、彼女も店の中へ入る。

店の中に入ると、右にあるカウンターが目に入るが、そこには誰もおらず、カウンターの奥にあるだろう在庫が置かれてる空間にさえ誰もいない。

「あの、こここの店の人は……」

「お、いたいた。店長」

ウィンが質問をする暇もなく、クウは店の中でデュエルをしているバンダナを着けた金髪の女性へと近づく。

「あの人がこの店の方なんですか？」

クウが先に行ってしまったので、ウィンは隣にいた折州に話しかける。彼の顔に疑惑がまだ残っていたのだが、「まあ、一応ね」と小声で答えられる。

彼の呼び掛けに気づいたのか、店長は彼の方を見てからデュエルを中断して立ち上がる。

「クウー！おかえりー！」

「じぼはっー！」

立ち上がった店長らしき女性……いや、身長的に言えば少女は満面の笑みを浮かべながらクウへと捨て身タツクル（鳩尾）に決めて、そのまま彼を押し倒す。

「店長、いきなり捨て身は止めるよ！お客がビックリするだろうが！」

「えー、大丈夫だよ。もうこの店の常連しか居ないから」

「待て、それは常連にとって日常茶飯事と誤解されるから」

「日常茶飯事じゃないのか？」



二人が倒れ込んでる近くに一人の男が近づく。黒いハット帽に黒いスーツ。どう見ても一世代前のジェントルメンにしか見えない。

「雁間！見てないで助けて！」

「はっはっは。こんな面白い光景、普通じゃ見れないから写メってやるヨ」

「雁間！雁間！ピース！」

二人のお気楽な行動を見て、クウの何かが切れる。

「人の話を　　聞けええええええ！」

店長を退かして立ち上がり、クウは荒ぶった息を整える。

「クウがキレたー!」

「今日は一段と荒ぶってるナ」

「日常茶飯事みたいに言うなっつてるだろうが!かなり重要な話があるんだからな!」

重要な話と聞いて、店長と呼ばれた少女(?)と雁間は互いの顔を見合わせたあとに、近くの椅子へと座る。

「じゃあ、重要な話って何だヨ」

「ついに私と結婚してくれるんだね!」

「だから話を脱線させるな!それ以上脱線させるなら、お前の人生脱線させるぞ!」

「それってクウが私を襲って、アーツなことをした後には責任を取るみたいな感じ？」

「断じて違う！！」

「店長……いい加減にしないとクウが壊れますよ」

折州の助け船によって、なんとか話を戻してもらった。そもそもきちんとした会話すらしてないのだが。

それらのやり取りを見ていたウィンが目をパチクリさせながら近づいてくる。

「クウ、その子……」

店長がウィンに気づき、目を丸くする。ジッと見つめられたせいか、ウィンが後退りを始める。

ようやく話が進むと思い、クウが口を開いた。

「そう、彼女はウィンだ」

「ウインは俺の嫁ってうるさかったけど、ついに家出少女にウインのコスプレをさせるまで重症になるなんて……」

「離せ折州！一度殴らないと気がすまない！」

ハンカチで涙を拭く店長に向かって椅子を振り下げようとしたクウを折州が抑えていた。

「これ以上店長の流れに呑まれたら出れなくなるから止めようよ！」

「くっ……」

折州の説得の末、なんとか怒りを抑えたクウは大きな溜め息をつ

いていた。

「さてと、クウを弄るのも飽きたし、本題に入るカ」

「……私を本物って信じてくれるんですか？」

雁間の言葉にウィンが半ば驚き、啞然としながら問いかけると、彼は笑いながら「まあナ」と答えてくれた。

「そもそも、クウはコスプレとかあまり好きじゃないからナ。コスプレ少女を連れてくるのはまずない。なら、君は本物のウィンってことになる。簡単な推理だヨ」

「でも……」

「クウと折州は今の弄りで正常って分かったし、気にしなくて大丈夫だよー！」

店長はその小さな腕を羽のようにパタパタさせながらウィンへと抱き着く。クウはそれを横目で眺めた後に雁間へ向き合う。

「……じゃあ、今度こそ本題に入るぞ」

「おう」

ようやく本題に入れたクウは二人に対して、さっきの出来事を伝える。

遊戯王のモンスターの実体化

ミリトウムがボット並に走ったこと

ウィンがクウ達に助けを求めたこと

ゾーンとウィンのデイスク化

ミリトウムとのデュエル

そして、ミリトウムとのデュエルの結末……

全てを聞き終えたあとの二人はさっきまでのふざけた雰囲気は一切切出しておらず、真剣そのものだった。

「ふむ、大体の話は分かったが、色々疑問が生まれるナ」

「疑問？」

折州が頭を傾げる。雁間はその後、淡々とその疑問を並べていく。

「まずはウイン、君が本物であることは信じよう。だが、なぜ君はミリトゥムに追われていたの力、そして対抗する手段を自分で行使しなかったの力。それが1つ目の疑問ダ」

「そついや、そつだったな……なんで追われてたんだ？」

頭を傾げながら、クウはウインへと問い掛ける。彼女はまるで叱られているような感じで俯き、目を反らそつとする。

「別に怒ってるわけじゃないンダ。理由が聞きたいだけだヨ」

「……わかりました。まず、追われていた理由から話します。私はこことは違う世界に存在していました。これが皆さんの言う【精霊世界】に当たります」

【精霊世界】 遊戯王の世界観を示すために生み出された虚構の世界。しかし、大きくなりすぎた虚構はその姿を別次元で現実のものとしたのだ。

「存在していた？」

今度は店長が頭を傾げる。それを見たウインは俯いて、声を震わせる。

「精霊世界は【ある存在】に消されてしまいました。この世全ての世界を喰らい尽くすまで補食を続ける存在に……」

そこにいた四人は黙ってそれを聞いていた。声を震わせながらも必死に伝えようとするウインに対しての誠意として。



「世界が無くなれば、そこにあったものは世界の狭間へと閉じ込められます。他のみんなもそこに閉じ込められて、唯一私だけがこの人間世界と精霊世界を繋いでいた門に辿り着けたのです。ですが……」

ついにウインは泣き崩れてしまった。悲しみが、寂しさが込み上げ、彼女はそれを吐き出すように喚いた。

「ウイン」

クウが彼女へ駆け寄りうとした時、その腕を雁間が掴む。

「雁間、離してくれよ」

「これはウインが越えなければいけない壁　お前が手出ししたら、意味がないゾ」

「だけどさー!」

彼の激昂が店の中に響き渡ると、ウインが再び顔をあげる。目は赤くなり、頬にはまだ涙の潤いが残っている。

「すみません、取り乱してしまって……」

「ウイン、無理すんなよ?」

「はい……私が門に辿り着いた時、精霊世界を壊した存在が門で待ち構えていたのです。私は必死に逃げようと思いました。」

「けど、奴は私が仲間から託された【ある力】を狙っていたのです」

「ある力……もしかして、あの【ゾーン】とかのことか?」

「はい。世界の理をある一つの理に変換させる【ゾーン】、そして使用者の思いによって力を得る【エンプティ】、それは奴にとって

都合の悪いものらしく、私は消されそうになりました」

ウインは一呼吸だけ間を空け、話を続ける。

「なんとか門を潜り、こちらに来れたところまではいいのですが、行く宛があったわけでもないのです、あちらこちらを移動していたら、奴の刺客が来たのです」

「それがミリトウム……」

「私一人でも【ゾーン】を展開はできましたが、【エンプティ】は私以外の人がないと使えなかった。必死に誰かに助けを求めていた時、クウ　あなたが現れたのです」

「なるほど、話は繋がったナ」

「【ゾーン】っていうのは、つまり……デュエルが世界の理にするってことだねー？」

雁間は納得したようで小さな溜め息をつき、店長がワインの腕に巻き付くように抱き着きながら問い掛ける。

「そうみたいです。私も【ゾーン】が作り出す理がデュエルとは知らず……クウと折州には本当に感謝してます」

「いやー、それほどでも……」

鼻の下が酷く伸びたクウの隣で折州は腕を組みながら何かを考えていた。

「ねえ、一つ聞いてもいいかな？」

折州が改まってワインに問い掛けると、彼女は戸惑いながら「はい……」と答える。

「ウインがこの世界に来たってことは、世界の狭間って場所にはヒータがいるってこと……かな？」

「私しかこの世界に来ることが出来なかったので……ヒータ達がいたら、どれだけ心強いか……」

「ならさー！」

折州が立ち上がり、何かを決意したようにガッツポーズを取る。

「世界の狭間からヒータ達を助けたそうよ！閉じ込められているってことは、まだ死んではいないはずだよ！」

「た、確かに死んだとは言っていないですけど、世界の狭間は時空間が完全に狂った場所……生きてる希望は……」

再び俯きかけたウインの肩に誰かの手が置かれる。彼女が上を見

上げると、そこには緑髪の少年が鮮やかな緑色の目で自分を見つめていた。

「なら、死んでるってこともないだろ。もしかしたらヒータだけじゃない。他の奴等も世界の狭間に閉じ込められて、助けを求めているかもしれないだろ？なら、助けに行く価値はある」

彼の言葉がウインの心に染み込んでいき、それは涙として瞳から零れ落ちる。

「ウ、ウイン！？あれ、俺なんか変なこと言ったか？」

「大丈夫、それは嬉し泣きだから。よし、方針は決まったナ。俺達は世界の狭間に囚われし精霊達を解放するために戦うとする力」

「やったー！戦争だ！」

「店長、よろこぶところじゃないですよ……」

ウインは戸惑いを隠せずにした。なぜ彼らは今日初めて出会った自分にここまでしてくれるのだろうか。

すると、後ろにいたクウが無垢な笑顔を彼女へと向ける。

「俺の仲間、いい奴等だろ？」

「……はい」

ウインは涙を拭いながらそう答える。

すると店長が「あ、そうだ」と何か思い出したようで、彼らの方に振り向く。

「私、今日用事あるから、もうお店閉めるよー」

突然の台詞に全員の反応が遅れる。

「えっと、用事……って？」

「もう、そんなこと聞くなんて野暮だよ。ひ・み・つ、だよー！」

「……ああ、そうですかい」

クウは呆れてもはや何も言つまいとした顔でそう言った。

「そういえば、クウ」

「ん？」

「ウインの宿はクウの家で大丈夫なの？精霊とかじゃないなら消えることもできないし……」



「えっ……?」

折州の言葉を聞いた途端、口が半開きになったまま棒立ちをするクウ。

「まあ、ウインと一番関わりのあるのはクウだしな。適任だ口」

「いやいやいや、待て。俺はまだ心の準備が……」

「心の準備ー?クウ、一体ウインちゃんに何を期待してるのかなかなー?」

「違っ……!!」

「クウのお顔が真っ赤っか!」

店長に隙をつかれ、容赦なく攻められるクウはどう答えたらいいか分からず、頭を掻きむしる。

「店長、そのくらいにしてあげなよ……」

「だって面白いもーん！」

「……でも、ウインはクウの側に置いてくべきじゃないかな？」

「どっぴいっことだ？」

何のことか分からず頭を傾けると、折州はいきなりウインの手を握ると、それを見たクウが少しばかり顔を歪める。

「まず、僕とウインでは【奴ら】と戦えないかもしれない。まあ、理由はいくつもあるけど、ウインがゾーンを展開しても僕がそれに適応してないかもしれないじゃない？」

折州の解説を必死に理解しようとするが、クウの頭は折れそうなくらいまで傾いている。

「クウはさつきウインと一緒に戦えたけど、僕とウインはそう行くとは限らない。だからウインと僕と一緒に行動するより、クウと一緒に行動した方がいいんだよ。もしもの時に対処しやすいしね」

「ああー、なるほど」

相槌を打ち、彼はすっきりした表情になる。

「とりあえず、その話は置いておこう。  
折州」

「ん？」

クウに呼び掛けられ、折州はよく分からないまま返事をする。

### 次の瞬間

「テメエ、いつまでウインの手を握ってるつもりだあああああ！  
」！  
」

店内にてクウのドロップキックが炸裂。勢い余って壁にぶつかった折州は「ふえ〜……」と情けない声を上げながら気絶する。

「クウ！？」

「あーあ、またやったナ」

「ウインちゃんのためなら、恩人でさえ蹴り飛ばすクウクオリティは健在だね」

ウインが戸惑いながら二人の会話を聞いていたが、少し浮かない

表情をしていた。

クウはというと、いい汗かいたなと言わんばかりに額を拭う。

「またやっちゃまったな……明日謝らないと……」

そう言いながら、クウは自分の自転車を押していた。

あの後、気絶した折州は雁間の車によって送られたが、自転車は運べなかったため、ウィンが折州の自転車を押して運ぶことになったのだ。

「すまねえ、ウィン……なんか手伝ってもらって」

「大丈夫ですよ。私もクウと二人っきりで話があったので……」

「二人っきりでの話!？」

すると、クウの口が空気を求める魚のようにパクパク動きだす。

ふ、二人っきりの話ってなんだ!？暗くてウィンの顔がよく見えないが、まさか……まさか、結こ

「私のことで、いつも人に暴力を振るっていたって本当ですか？」

彼女はクウが考えてたのとは裏腹に、彼を軽蔑するような声色になる。

「えっ、いや、その……」

「答えてください」

彼女の声のトーンが一気に下がる。クウは若干涙目になりながらも、ゆっくりと口を開く。

「まあ、確かにウインに痛い目合わせた奴らにはリアルファイトをしてたけどさ……」

それを聞いたウインが足を止める。それに気づいたクウも足を止め、彼女へ振り向く。

「どっしたんだ？」

「もう、そんなことで人を傷つけないでください……」

「えっ？」

彼が気づいた時、すでに彼女の目から涙がこぼれ落ちていた。

「もう、私なんかのために、人を傷つけて欲しくないんです……！」

「……こつち（人間界）に来る前に何かあったのか？」

その問いかけに彼女は何も答えようとはしなかった。しかし、このままでは何も進まないと思ったのか、クウはウインを連れて近くの公園のベンチに座り込む。

「何があったか、話してくれないか？」

クウがそう問いかけるが、ウインは未だに涙を拭っている。少しだけ落ち着いたのか、彼女はその口を開き始める。

「……私が精霊界からこつちに来る際、私が持つ二つの力を守るために多くの人達が【奴】に食べられてしまいました。こんな力のせいで、大切な友達が私の身代わりになって……こんな力が無ければ、私は彼女を失うことは無かったのに……！彼女にこの力を託せばよ



かったのに、私はそれをしなかった。

理由は簡単ですよ。死ぬのが怖かった。……クウはとてもない人です。だから、こんな私のために大事な力を使って欲しくないんです……！」

「だが、断る」

ウインが言ったことを彼は無下に否定する。

「な、なんですか！？私なんて、ただの力の塊……この世界に本来するはずのない存在、人間ですらな」

「それ以上、自分を否定したらダメだ」

彼女が気づいた時には、すでにその体はクウの腕に包まれていた。

「人間じゃないとか、この世界の存在じゃないとか、関係ないだろ。ウインの体、あつたかいじゃないか。生きてるじゃないか。それ

だけで、ウインはここに存在している。人間とかそんなの、生きる  
ことには関係ないしな」

「クウ……」

二人が夜の街灯に照らされながら、抱き締めあっていた時、それ  
は現れた。

「あのー……そろそろいいかな？」

二人じゃない誰かが彼らに話しかける。

二人は警戒心を解かないまま、声が出た方を見る。

そこには青みがかったツンツン髪にジャージ姿という童顔の少年  
が立っていた。その手には【スーパーモリンフェン】と書かれたス  
ーパーの袋がある。

「なんだ、牡丹ぼたんか……びっくりさせんなよ」

クウは彼の招待を知るやいなや、彼に駆け寄る。

「びっくりしたのは僕の方だよ。何あの子、クウの彼女？彼女にしてはウインにそっくりだね……まさか、家出少女に」

「それ以上理由を聞かずに口を開くなら、お前の減らず口を永遠に開きっぱなしにする」

クウの手にはスーパーの袋に入っていたグレープフルーツが握られていた。

「ははっ、冗談だよ。でも、ウインにそっくりだね」

「だってウインだもの」

「えっ？」

「理由はあとで。とりあえず折州の自転車運ぶの手伝え」

「えっ、ええー」

「え、だけで会話するな……いくぞ」

「えーい……」

ため息混じりに牡丹はワインが押していた自転車の籠にスーパーの袋を入れると、それに跨がる。

「こっちの方が速いから、乗ってくよ」

「おう。ワイン、後ろに乗れよ」

「は、はい！」

クウはワインを自転車の後ろに乗せ、牡丹の後ろを追いかけ行く。

「なるほど、精霊界つてところから……よくラスカークみんなは信じたね。僕だったら真っ先に疑うよ」

折州の自転車を届けた後、二人は牡丹にワインのことについて話した。最初は半信半疑だったが、すぐに信じてくれた。

「そっぴやその袋、おつかいの途中だったのか？」

「寮長がご飯作ってるわけないからね」

「だな」

二人の会話について行けず、ウインは黙ったまま二人についてきている。

「ウインさん、今日何が食べたい？」

さりげなく牡丹がウインに話しかけるが、彼女は何かを言おうとして口を閉ざす。

「ウインさん？」

牡丹が頭を傾けると、クウが牡丹の肩に手をかける。次の瞬間、

巨大な握力が牡丹の肩にかかる。

「痛い痛い！」

「ウインは精霊界から来たって言ったのがわからんのか」

「えっ……ああ、そうだったね！ウインさんごめん、そしてクウ、  
肩が痛い！」

牡丹は必死に彼女に謝りながら、クウに痛みを訴えかける。

「ったくよ……」

「あ、あの！」

クウが牡丹の肩から手を離すと、ウインが何かを決意したようで、

彼らに声をかける。

「どつした？」

「は、『はんばーぐ』というのが食べてみたいです」

「ハンバーグ？なぜに？」

「さっきラスカークに向かっている時に目に着いたお店に書いてたもので……写真がともおいしそうで……ダメ、ですか？」

彼女の問いかけに二人は顔を見あってから、ちょっとだけ笑う。

「牡丹、ハンバーグだってさ」

「わかったよ。ちょうど買ってきた食材とかでハンバーグ作れそう



だし。ウィンさんのご希望とあれば」

二人は優しく微笑みながら、そう答える。それを見たウィンも少しだけだが、笑顔を取り戻していった。

そんな会話をしていた間に彼らの足は古い木造アパートの前で止まる。

「さて、着いた」

「ここが……クウ達の家ですか？」

「家つつうより、廃墟みたいだろ？」

クウが木造アパートを指差しながらケタケタと笑う。その時、アパートの引き戸がガタガタと不気味な音を立てながら開く。

「ほう、俺の城を廃墟と呼ぶか」

「げっ」

「覚悟しろ、クウ！」

引き戸の先にいたのは目が隠れるまで茶髪を伸ばした青年だったが、その手には野球ボールが握られていた。

「死ねや！」

「だが断る！」

クウは茶髪青年が投げたボールを近くにあってた廃材で難なく打ち返す。ボールは茶髪青年の顔面に当たり、そのまま青年は倒れてしまふ。

「ふう……」

「な、なんで自然に振る舞ってるんですか!？」

「ここではこれが日常だからね」

「このことというのは、このアパートのことだろう。牡丹は茶髪青年を無視してアパートの中へと入って行く。」

「あの人、大丈夫なんですか？」

「打たれ強さだけは天下一品ものだから大丈夫だ」

「そう言いながらアパートに入るクウを追いかけるようにウィンも中に入るのだった。玄関には顔面に野球ボールをめり込ませた青年が倒れた絵しかなかった。」

5分後

「さっきはよくもやりやがったな！」

「復活早っ！」

何事も無かったようにリビングに現れた青年を見て、ウインは思わず自身の口調が変えてしまうほどのツッコミを入れてしまったようだ。

「野球ボールは危ないだろ」

「それを廃材で俺に打ち返すお前も危ないわ！ところで、その娘はなぜ俺の城に？」

青年はジロジロとウインの姿を眺めていたため、クウが立ち上がって彼の額に額をぶつける。どう見てもガンの飛ばし合いだ。

「ジロジロ見んなよ」

「ここは俺の城だ。俺に許可なく城に入るとは俺が許さねえ」

「なら今日の晩御飯、お前の分だけ抜くからな」

「すみませんでシタ」

青年はクウの一言で土下座体勢になった。

「で、本当に誰なんだよ。まさか、家出少女に」

「よし、飯抜き。ついでに店長とお前の頭が繋がっているか調べるからそこから動くな」

「NO!そんなのダメ!ゼツタイ!」

閑話休題 牡丹が飯を作っている間にワインについての話をし  
て、青年は半信半疑でそれを受け入れていた。

93

「なるほど。で、俺の城に住まわせて欲しい訳か」

「そういつことだ」

「あの……『俺の城』って、今さらですが、あなたがこのアパート  
の主なんですか?」

ウィンがそう言ったので、二人は軽く頷く。

「こんなのだが、これがこのアパート【天集莊】てんしゅうせうの主である。『有塩』ありしお尚』しやうだ。ついでにあっちのちっこい奴が『稻妻』いなずま 牡丹』ぼたんな」

「こんなのってなんだよ！」

「ちっこい言うな！」

二人からのツッコミを受け流しながら、クウは話を進める。

「で、どうなんだよ。有塩さんよ」

「どつせ断つても弱味を出すつもりだろ」

「まあな。なあ、牡丹」

そう言つと、牡丹のジャージポケットから何か銀色に光ものが現れる。手のひらサイズの棒状に見えるが、よく見るとボイスレコーダーのようだ。

「？」

「再生」

カチッ

『小鳥たんかあんわいいいいいい』

「うわあああああ！わ、わかった、わかったから、それは止める」



「交渉成立だな」

「私が言える立場じゃないんですが、酷すぎますよ……」

ウインは複雑な気持ちになりながらも、このやり取りに一種の安心感を覚えていた。

「交渉成立したなら、先に部屋に案内したら？僕はまだ晩御飯作らないといけないし」

有塩は「それもそうだな」と言いながら立ち上がり、ウインを連れていく。言うまでもないが、クウもそれについていった。

「他の奴らは？」

「まだ帰ってきてない。いつものことだろ」

「まあ、そうだな」

軋む階段をゆっくり登っていくと、少し長めの廊下に行くつかのドアが現れる。

「部屋はクウの二つ隣が空いてたはずだな」

「さて、隣の奴に因果切断してくるわ」

「除外できるのか【アレ】を!？」

クウが自分の部屋の隣という6つあるドアの内の奥から2番目のドアを容赦なく開いた。すると次の瞬間、女性のものであろう甲高い悲鳴がアパートに響き渡る。

「何ですか!？」

「やっちまったな……」

悲鳴がした方にウインが向かう中、有塩は呆れた表情でそれについて行く。彼女がドアの先の光景を見ると、そこには金髪のロングヘアを持つ少女がタオルで体を覆っており、クウが倒れている。彼の近くには置物らしき土偶が転がっていた。

少女の姿はまるで洋風の十二単を着ているようで、和と洋が入り交じっている。

「クウ!？」

「お約束過ぎて、アホらしいな……」

「い、いきなり開けるからビックリして、その、すみません!」

金髪の少女は口パクが混じりつつ、タオルで顔を隠そうとする。そこでウインは彼女の足が股の近くなのに素足ということに気づく。

「あの、もしかして……タオルの下に何も着てないんですか？」

「し、下着は着ています……すみません……」

恐らく、クウは土偶をぶつけられて気絶したのだろう。鼻の上から真っ赤に染まっている。

「……なんでこいつは死んでないのやら」

有塩が汚い何かを警戒するように足で様子を確認する。その中、ウインと少女が見つめあっている。すると金髪の少女がウインの顔を見ながら口を開く

「このお方は？」

「ウインだ、事情はクウから聞いてくれ。そういやお前のことは言  
つてなかったな。ウイン、こいつはこの205号の住人である【兎<sup>と</sup>  
野坂<sup>のさか</sup> 由樹<sup>ゆき</sup>】だ」

「「よ、よろしく願いします!」「」

有塩の紹介が終わった途端、互いにタイミング良くハモらせつつ  
挨拶をする。

「でもなんでそんな姿に?」

「あのですね……少々趣味に没頭いたしまして……その趣味をして  
いた中に彼が入ってきまして……」

趣味と聞き、ウインは周りを見渡す。そこには小さな土偶の置物、  
はにわの抱き枕、古い書物が置かれた本棚、鏡は青銅鏡、電灯の笠  
が銅鐸のように細長かった。

そして、ウインは彼女の隣に転がっているはにわの着ぐるみを見  
つけたのだった。

「古代日本について少し興味がありまして……」

「はにわの着ぐるみを脱いでた時にクウが入って来たわけですね……」

「い、いえ、着ていた時です！」

「どっちでもいいわ！」

そう言って、気絶していたクウが立ち上がる。

「俺の部屋が端だから、こいつをどかさないとウインの隣になれないんだよ！」

「うちのアパートは学校の席じゃねえ。わがまま言つな」

「うっ……」

有塩によつて食い止められ、しぶしぶ怒りを抑えたクウだった。どう考えてもクウが悪いが。

この後、由樹の部屋の隣である204号室をウインに見せ、彼らは牡丹の作るハンバーグを食べるために一階のリビングへと向かうと、そこにはこんがり焼かれたハンバーグが皿に盛られていた。

「おお！うまそ」

「つまみ食いはダメだからね」

フォークを片手にハンバーグを突こうとしていたクウだが、こちらを見ていないはずの牡丹に食い止められる。まさに食うことを止められていた。

いくつかの空席があるが、今寮にいる全員が席につくと、両手をあわせる。

「いただきます！」

「うまい！」

「早っ！？」

次の瞬間に牡丹がクウの皿を見ると、ハンバーグの姿は無かった。食べ方は様々だ。ウインや牡丹は箸をうまく使ってハンバーグを細かくしてから食べ、有塩はフォークとナイフを使っている。クウの食べ方も箸なのだが、持ち方が悪すぎる。

「いい加減に箸の持ち方を直した方がいいんじゃないのか？」

「好きなものを好きなように食うのが俺流だ」

「それ、ダメ人間の発言だよ……」



有塩と牡丹がクウに呆れている間にウィンもハンバーグに手を付ける。

「どっ？」

「とてもおいしいですー！」

「そう、それなら良かったよ」

無邪気に笑うウィンに対して牡丹も優しく微笑む。それを見ていたクウは食事を平らげるや否や、食器を持って流し台へと向かう。すると、自分が使っていた食器をもくもくと洗い始める。

「クウ？」

「ははっ、やっぱり面白いな」

「？」

有塩の発言の意味を理解できずにいたが、ウインはあることに気づく。

「あの、由樹さんは……？」

「由樹は『燕堂くん到下着を見られたから、顔が会わせられない』って言うてから、部屋に閉じ籠った」

「あー……」

食器を洗いクウは自身の部屋である206号室にあるベッドの上に横たわる。部屋の中はドアと向き合うように枠組み窓があり、ベッドは窓に垂直となるような位置に置いてある。

部屋の中は小さな机とベッド、そして少し大きめの本棚しかない。

「なにやってるんだろう、俺……」

思い返すたびに自分が自分じゃないと考えてしまう。

度を越えた発言、ワインにいいところを見せたいがためにいつもはしない皿洗いをした。

それで何か変わるのだろうか。ワインはこの世界が『世界の捕食者』に食べられないように来たのだから、俺に構っている暇はない。それは分かっている。

しかし、牡丹に見せた笑顔を自分に見せて欲しかった。ただそれだけで自分らしさを捨てた。

これは成長なのか？いや、これはただの背伸びでしかない。それは自分でも分かっている。だからこうやって悩んでるじゃないか。

「落ち着こう……明日も学校だしな。少し早いが寝るか」

そうしてクウが布団にくるまった時、部屋のドアからノック音が響く。

「誰だ？こんな時間に……」

時刻はすでに22時を回っていた。この寮では23時には消灯されるため、寮生はすでに部屋にこもっている時間帯だ。

「すみません、私です」

声を聞いた途端、クウはベッドから飛び上がり、ドアノブに手をかけた。しかしその時、足を滑らせてしまい、勢い余ってドアを開けると同時に廊下に飛び出してしまふ。

「のわぁ！」

「きゃあ！」

クウが開いたドアに声の主が当たらなかったが、飛び出してきた彼と正面衝突してしまう。

「いてて……」

思わず目を瞑ってしまったクウはゆっくりとその目を開く。そこには声の主であるウインの姿があったが、なぜか彼女の顔しか見れない。

理由は明白　クウが彼女の胸にダイブしてたからだ。

「ウ、ウイン!?!」

「えっ……?きゃあああああ！」

「ぶぶっ!」

目を瞑っていたウインは目を開いた途端、彼の頬に強烈なピンタをかまし、その意識を飛ばしてしまった。

「ああっ！」

ウインが彼の肩を揺するが、鼻血を吹き出しながら彼は幸せな表情で気絶している。

仕方ないので、ウインはクウの耳元でこう囁いた。

「……あなたの場所に連れてきてくれて、ありがとうございます」

彼の頬に何か柔らかい感触があったが、彼がそれに気づくことは無かった。

T o b e c o n t i n u e d ……

第二章 〽同じ意思が集う場所〽 (後書き)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3613x/>

---

虚構を愛したもの達

2011年12月28日03時47分発行